

『源氏物語』紅梅卷の贈答歌考

一登場人物の居所との関わりから一

金 秀 美*

目 次

1. はじめに
 2. 「紅梅」をめぐる紅梅大納言と匂宮との認識のズレ
 3. 匂宮の返歌の二重性
 4. 二度目の紅梅大納言と匂宮との贈答の場面
 5. おわりに
-

1. はじめに

源氏の死後、頭中将家(かつての左大臣家)の後日譚を描く紅梅卷は、正編と宇治十帖の間に位置する匂宮三帖の中の一帖である。従来、成立事情や過渡期的な性格という側面から主に論究されており、他の巻に比べて、さほど重要視されてこなかったきらいがある。しかし、近年では、神野藤昭夫氏¹⁾や原陽子氏²⁾により、この巻が宇治十帖の物語と緊密な相関関係を有していることが論究され、門沢功成氏³⁾により、この巻の歌の引用の諸相が検討される等、紅梅卷を『源氏物語』の中で積極

* 高麗大学 非常勤講師

- 1) 神野藤昭夫(1986.5)「紅梅卷の機能と物語の構造——『源氏物語』宇治の物語論のための断章——」『源氏物語とその前後』桜楓社 p163-183
- 2) 原陽子(1991.11)「紅梅卷と宇治十帖——宇治十帖後半の論理に果たす紅梅卷の機能——」『中古文学』第四十八号 p45-53
- 3) 門沢功成(2004.5)「『源氏物語』紅梅卷の贈答歌と引歌群——梅花への共感と匂宮への共感——」『古代中世文学論考』第十二集,新典社, p153-173、「『紅梅』巻の贈答歌の解釈」鈴木一雄監修・陣野英則編集(2005.3)『源氏物語の鑑賞と基礎知識N o38 匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂、p124-126

的に位置づけ、紅梅巻それ自体の内容を検討しようとする試みが行われている。そのような姿勢を引き継いで、本稿も紅梅巻における歌を取り上げ、検討してみたい。特に、ここでは、この巻における歌を把握する一つの方法として、その歌の表現や解釈を登場人物の居所と関わらせて検討してみることにする。

君たち、同じほどに、すぎすぎおとなびたまひぬれば、御裳など着せたてまつりたまふ。
七間の寝殿広くおほきに造りて、南面に、大納言殿、大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませたてまつりたまへり。おほかたにうち思ふほどは、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど、こなたかなたの御宝物多くなどして、内々の儀式ありさまなど心にくく気高くなどもてなして、けはひあらまほしくおはす。
 (紅梅巻四〇—四一頁) 4)

紅梅巻の冒頭には、藤原家の当主となった紅梅大納言の家族事情、言わば、本妻の死亡、真木柱との再婚、子達の成長等を紹介した後、傍線部のように、登場人物の居場所が書き記されている。ここでは、紅梅大納言が先妻所生の大君、中君、又、真木柱が連れてきた宮の御方を寝殿に住ませ、大事に育てる様子が描かれるが、このような登場人物の配置は、大君の入内により変わっていく。大君が春宮の妃として入内し、真木柱がその後見人として内裏に参入することによって、寝殿には、大納言、中君、宮の御方のみ残ることになる。以後、物語は、紅梅大納言と匂宮との贈答を中心にして、大納言家の婿どりの話が展開されていくのである。

現代の諸注釈⁵⁾では、紅梅大納言の贈歌を、実子である中君との結婚を匂宮に申し込むものとして解釈し、それに対する匂宮の返歌も、中君に対する大納言の結婚の申し込みを断るものとして理解されてきた。しかし、寝殿の西面にいる中君と、東面にいる宮の御方という、二人の女君の居場所に留意し、それを歌の解釈に関わらせて検討

4) 以下、『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注(1997.7)『新編日本古典文学全集源氏物語⑤』小学館 による。適宜傍線・記号を付した。p39~56

5) 本稿で用いた『源氏物語』の現代の主な注釈書は、以下のようであり、各々略称を用いた。

- ・『全書』一池田亀鑑校注(1954.1)日本古典全書『源氏物語五』毎日新聞社 p150~163
- ・『大系』一山岸徳平校注(1962.4)日本古典文学大系『源氏物語四』岩波書店 p235~248
- ・『玉上評釈』一玉上琢弥著(1967.7)『源氏物語評釈第九卷』角川書店 p247~284
- ・『全集』一阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注訳(1975.5)日本古典文学全集『源氏物語五』小学館 p33~50
- ・『集成』一石田讓二、清水好子校注(1982.5)新潮日本古典集成『源氏物語六』新潮社 p181~196
- ・『新全集』一阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注(1997.7)『新編日本古典文学全集源氏物語⑤』小学館 p39~56
- ・『源氏物語の鑑賞と基礎知識』鈴木一雄監修・陣野英則編集(2005.3)『源氏物語の鑑賞と基礎知識 N o 38 匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂 p77~126

してみると、紅梅大納言と匂宮との贈答には、中君のみならず、宮の御方のことも影を落としており、それゆえに、より複雑な意味合いを有する贈答歌であることに気づかされる。

本稿では、このような登場人物の居所を、物語本文や歌の解釈に反映させることによって、従来とは異なる読みの可能性を探ってみたい。

2. 「紅梅」をめぐる紅梅大納言と匂宮との認識のズレ

大君の入内の後、紅梅大納言は、北の方である真木柱と大君がいない隙を利用して、宮の御方の居所に頻繁に足を向けることになる。この時点から、物語では、唐突に大納言の宮の御方に対する恋情が描き出されることになっている。本文（一）は、大納言が、宮の御方の居所にやって来て、音楽の話を手がかりとしながら、宮の御方に接近する場面である。

（一）若君、内裏へ参らむと宿直姿にて参りたまへる、わざとるはしき角髪よりもいとをかく見えて、いみじくうつくしと思したり。麗景殿に御ことつけ聞こえたまふ。「(a)譲りきこえて、今宵もえ参るまじく。なやましくなんと聞こえよ」とのたまひて、「笛すこし仕うまつれ。ともすれば御前の御遊びに召し出でらるる、かたはらいたしや。まだいと若き笛を」とうち笑みで、双調吹かせたまふ。いとをかしう吹いたまへば、「けしうはあらずなりゆくは、このわたりにておのづから物に合はするけなり。なほ掻き合はせさせたまへ」と責めきこえたまへば、苦しと思したる気色ながら、爪弾きにいとよく合はせて、ただすこし掻き鳴らいたまふ。皮笛ふつつかに馴れたる声して。

(b)この東のつまに、軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたるを見たまひて、「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿宮内裏におはすなり。一枝折りてまなれ。知る人ぞ知る」とて、「あはれ、光る源氏といはゆる御盛りの大將などにおはせしころ、童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。……」など、聞こえ出でたまひて、ものあはれにすごく思ひめぐらししをれたまふ。
(紅梅卷四七一四八頁)

宮の御方の前に入り込んでいた大納言の許に、時折若君が登場する⁶⁾。大納言は宮の御方のところを離れがたく、傍線部 (a) のように、麗景殿 (大君) の所に参内しない口実を作り出し、そのまま座り込んでいる。又、若君に笛を吹かせ、宮に「掻き合はせ」の演奏を催促し、自分もそれに合わせて口笛をする等、宮の異腹である若君を、この場に参加させることによって、より宮の御方と親密な雰囲気を作り上げてい

6) 若君は、紅梅大納言と再婚した真木柱との子で、大君、中君とも、宮の御方とも異腹弟に当たる。

く。しかし、傍線部(b)になると、大納言は宮の御方の居所の前に咲いた紅梅を見て、その花を宮の御方に渡しながら自分の心情を訴えるのではなく、中君の婿候補としての匂宮を思い出す。この時点で、大納言は、宮の御方の色好みの相手ではなく、中君の結婚の件で対策を練る父親としての姿を見せていくのである。更に、大納言は、匂宮に対し、紅梅の花と共に中君との結婚を求める歌①を詠み、若君をしてそれを紅梅の花と共に匂宮に贈る。

① (大納言) 心ありて風のにはほす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき

(紅梅卷四九頁)

その、大納言が匂宮に贈った①の歌は、「(中君を匂宮に参らせたい) 心があって風が園の梅の匂いを吹き送るのだから、その梅にすぐにも鶯が訪れぬはずがありましようか」という意となる。諸注の指摘通り、この歌の中での「鶯」は匂宮、「園の梅」は中君を指すものである。即ち、この①の歌は、大納言が、自分の娘である中君の相手として匂宮に誘いかける内容である。しかし、若君からその花を受け取った匂宮は、もともと関心を持っていた宮の御方に一層思いを寄せる結果となってしまう。このように、この巻は、紅梅をめぐる、大納言と匂宮の間にズレが生じているが、その経緯を本文から確認してみたい。

まず、①の歌を見ると、大納言は、「園の梅」といったように、この紅梅を自分の邸宅の花と見て、自分の娘である中君の喩えとして使っていることが分かる。即ち、大納言は、この紅梅を「この東のつまに、軒近き」という、本文が提示した「東」というトポスは考慮せず、自分の邸宅に植えられた花として認識しているのである。更に、大納言が真木柱と語り合う場面(二)においても、

(二) (真木柱) 「若君の、一夜宿直して、まかり出でたりし匂ひのいとをかしかりしを、人は兵部卿宮に近づききこえにけり、むべ我をばすさめたりと、気色とり、怨じたまへりしこそをかしかりしか。なほと思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、ここに、御消息やありし。さも見えざりしを」とのたまへば、(大納言) 「さかし、梅の花めでたまふ君なれば、あなたのつまの紅梅いと盛りに見えしを、ただならで、折りて奉れたりしなり。移り香はげにこそ心ことなれ。晴れまじらひしたまはん女などは、さはえしめぬかな。……」など、花によそへてもまづかけきこえたまふ。

(紅梅卷五三一五四頁)

大納言は、「あなたのつまの紅梅」というように、自邸に植えられたものとして把握しているのである。

『玉上評釈』では、物語本文のように、歴史上にも、藤原氏の氏の長者の邸、東三条殿の寝殿の東南の角に梅の木があったと指摘する。又、そういうことが『兵範記』の記事や『年中行事絵巻』の絵に描かれているように、藤原氏の当主の邸宅に紅梅があったという事実は、当時の人々にも知られていたであろう。『源氏物語』においても、この大納言の宛名が『岷江入楚』で「紅梅のおとゝ」、又後世に「紅梅大納言」と称されてきたように、紅梅が植えられた大納言の家というのは、物語の中で印象的なものとして位置づけられていると言えよう。又、この「紅梅」という対象物は、その巻名が示しているように、この巻における大納言と匂宮とのやりとりに重要な素材として描かれているのである。

『源氏物語』の中で、ある花や植物がその植えられた所の女君の比喩と用いられ、物語におけるその女君の特徴を印象的に表現する一種の記号となっているのは、周知の通りである。この巻においても、紅梅大納言は、自分の邸宅の紅梅を自分の娘である中君の象徴として捉えている。が、既に三田村雅子氏が、「御前の花と中に住む人物との対応を考えれば、この花は当然宮の御方を指す花となる」⁷⁾と指摘しているように、東面の御前という紅梅の細部の位置からは、宮の御方の象徴という解釈も可能になるのである。前述したように、寝殿の東に住んでいるのは、紅梅大納言の実子である中君ではなく、真木柱の連れ子である宮の御方であったのである。

このように、この紅梅の位置を、大納言の邸宅、もしくは邸宅の東面というどちらに把握するかによって、その紅梅の象徴も中君か宮の御方かというように、異なる解釈になるのである。

では、匂宮は、この紅梅の花をどのように認識したのだろうか。それを、若君が匂宮に花を渡す場面から詳しく見てみよう。

(三) [匂宮] 「我をば人げなしと思ひ離れるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。古めかき同じ筋にて、(a) 東と聞こゆなるは、あひ思ひたまひてんやと忍びて語らひきこえよ」などのたまふついでに、この花を奉れば、うち笑みて、「恨みて後ならましかば」とて、うち置かず御覧ず。枝のさま、花ぶさ、色も香も世の常ならず。「園に匂へる紅の、色にとられて香なん白き梅には劣れると言ふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、(b) 御心とどめたまふ花なれば、(c) かひありてもはやしたまふ。(紅梅巻五〇一五一頁)

7) 三田村雅子(1996.3)「方法としての〈香〉」『源氏物語感覚の論理』有精堂、p153-173

本文（三）を見ると、傍線部（a）のように、匂宮は宮の御方を「東と聞ゆなる」と称しており、最初の人物配置の際に語られていた「東」という宮の御方の居所が、そのまま彼女を喚起する語として物語で用いられていることが分かる。即ち、この場面で匂宮が宮の御方に関心を示す際、彼は宮の御方の居所が東面であることを既に知っていたと見られる。又、若君は、そのような匂宮の言葉（a）を受けて、東面の前にあった紅梅の花を渡しているのである。このように、二人の間のやりとりには、東から、宮の御方へ、紅梅へという連想が行われているといえよう。とすると、傍線部（b）の「御心とどめたまふ花」というのも、単に紅梅の花、その実物を指すものだけではなく、宮の御方を暗に示唆するものではなかろうか。この箇所について、『大系』『全集』『集成』『新全集』では、「御前の前裁にも、春は梅の花園をながめたまひ……」（匂兵部卿卷二七頁）という前本文を挙げ、特に、梅花を愛好する匂宮の性格から説明しているが、ここでは、若君が渡したその紅梅の花に、元々匂宮が関心を寄せていた宮の御方のことが重なっていると考えられる。

又、その直後の（c）の「かひありて」のところで、『新全集』の頭注は「大納言が紅梅をさしあげたかひがあつて」と主体を大納言として解している。が、ここでは直接それを差し上げた若君と解した方がより妥当ではなかろうか。勿論、紅梅の花を若君を通して匂宮に差し上げたのは大納言であるが、匂宮は梅の花を褒めてはいても、大納言の意図のように、中君に関心を寄せているわけではなく、むしろ宮の御方に引かれるきっかけになっているのである。それは、後の本文（四）で明らかになるように、若君の日ごろの意図であった。

（四）（a）この君も東のをばやむごとなく陸まじう思ひましたり。なかなか異方の姫君は、見えたまひなどして、例のはらからのさまなれど、童心地に、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへを（b）かひあるさまにて見たてまつらばやと思ひ歩くに、春宮の御方のいとはなやかにもてなしたまふにつけて、同じこととは思ひながらいと飽かず口惜しければ、（c）この宮をだにけ近くて見たてまつらばやと思ひ歩くに、（d）うれしき花のついでなり。

（紅梅卷五二頁）

若君は、元々東の宮の御方を、（a）「かひあるさま」にしたいと思っており、（b）のように、その宮の御方の婿君として匂宮を思っていた。そのような若君にとって、紅梅大納言に頼まれ、宮の御方の居所に植えられた紅梅の花を匂宮に渡す使者となったのは、紅梅大納言の意図とは異なり、（c）「うれしき花のついでなり」であり、二人を取り持ちするよい機会であったのである。

又、本文（三）で匂宮が宮の御方のことを「東」と称したことと同様、この（四）の本文においても、若君が宮の御方を考える際に、宮の御方は（a）「東」と表現されている。又、以後の物語にも、「かの按察大納言の紅梅の御方をもなほ思し絶えず、花紅葉につけてものたまひわたりつつ、いづれをもゆかしくは思しけり」（宿木巻三八一—三八二頁）というように、宮の御方は、東面という位置と紅梅という対象と一体化して表現されているのである。

このように、紅梅の位置をどう把握するかによって、そこから連想される女君が異なってくるという、紅梅大納言と匂宮の認識のズレが生じてくる。匂宮は、東面が宮の御方の居場所であることを既に知っており、そこにある紅梅も宮の象徴として見る認識があったと考えられる。そういう匂宮に対して、紅梅大納言の方は、自分の邸宅のことながら、紅梅が植えられた場所が宮の御方の居所である東であることに頓着しないで、寝殿の東にある紅梅を匂宮に贈るのである。

このように、この巻での「東」の「紅梅」は、女君の象徴という機能だけではなく、大納言と匂宮の認識のズレを齎す媒介物としての機能をも果たしている。このような二人の認識のズレというのが、紅梅巻の独自の方法、鑑賞における重要なポイントになっていることについては、三田村雅子氏の、「一つの香が同時に二つの解釈の可能性を秘めたまま提示されるという紅梅巻の方法は、一対一の対応を素朴に信じていた正編の世界とはまったく違った、『ずらし』と『揺れ』の中に、続編の物語が始まろうとしていることを告げるものである」⁸⁾という明快な指摘や、『新全集』の、「紅梅をめぐる両者の思惑のくい違いがこの巻の一つの見所である」という説明からも言及されていた。

が、ここでは、紅梅の植えられた〈場所〉と寝殿における人物の〈位置〉によって齎された大納言と匂宮との認識のズレということが、以後の二人の贈答の場面、特に、その歌の解釈にも密接に関わっていることに注目し、その歌の解釈に関して、再検討を行ってみたい。

3. 匂宮の返歌の二重性

本文（五）は、本文（三）に続き、匂宮が、若君から大納言が贈った紅梅の花と歌を受取って、その返歌を詠む場面である。

8) 三田村雅子の前掲論文。p199

(五) (句宮) 「(a) この花の主は、など春宮にはうつろひたまはざりし」、(若君) 「知らず。心知らむ人になどこそ、聞きはべりしか」など語りきこゆ。(b) 大納言の御心ばへは、わが方ざまに思ふべかめれと聞きあはせたまへど、(c) 思ふ心は異にしみぬれば、この返り事、けざやかにものたまひやらず。つとめてこの君のまかづるに、なほざりなるやうにて、② (句宮) 花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過ぐさしやは
(紅梅卷五一頁)

ここでの (a) 「この花の主」は、『全書』『玉上評釈』『大系』『全集』『新全集』が「宮の御方」とし、『大系』が「中君」ととる。とすると、傍線部 (a) は、「この花の主である姫君は、どうして東宮に入内されなかったのか」の意となる。それに対して、『集成』は、「この花」を中君、「主」は大納言とする。又、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』は、「この花」を大納言邸の姫君たち、「主」は大納言と解している。すると、傍線部 (a) は「大納言はなぜこの紅梅を東宮に贈らなかったのか」という解になるのである。

この紅梅の花は、大納言の①の歌では中君を指し、句宮と若君のやり取りでは宮の御方の象徴であったことを考えると、「この花の主」は、女君を指す語と見るより、その花の管理者たる人、即ち、大納言と見るべきであろう。句宮は、紅梅を見て宮の御方を想起していたが、大納言がその花と共に贈った和歌は、明らかに娘との結婚の願望が仄めかされていた。句宮は、返歌を書く前に、「この花」が中君か宮の御方か、念押しに大納言の真意を確かめようとするのである。従って、②の歌での「この花」とは、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』の解のように、句宮が大納言の意図を探ろうとして、大納言邸の姫たちをひっくるめて言った表現と解する方が妥当であると思われる。その後、句宮は、若君の返事を聞いて、(b) 「大納言の御心ばへは、わが方ざまに思ふべかめれ」と、大納言の意図が「わが方ざま」である中君にあることを確認し、拒絶の②の歌を詠んでいるのである。

この②の返歌は、大納言の①の歌と同様、『古今集』の「花の香を風のたよりにたぐへてぞ驚さそふしるべにはやる」(春上・一三・友則) 9)を踏まえた歌である。従来、この歌での「花」は中君を指すものとされ、「花の香りに誘われるべき身の上であつたら、風の便りを見過ごすこともなかりに」と、反実仮想によって、自分の中君に誘われる資格がないと卑下しながら、大納言の申し入れを婉曲に拒絶したものと把握されてきた。

この句宮の歌について、門沢功成氏は、「自身には梅の花を観賞する能力はない

9) 以下、『古今集』の本文引用は、伊達家旧蔵本を底本とする『新編国歌大観第一巻』(1983.3) 角川書店による。表記を改めた所がある。p9~33

と謙退を装うことで大納言の申し入れを拒否」しているが、贈歌の勘所が大納言の歌と同じ古今集の歌を執拗に引用し、「表面的歌意とは裏腹に梅花を観賞する能力をほのめかしている」と指摘する¹⁰⁾。更に、門沢氏は、「贈歌に対する返答であるならば、中の君との結婚を断る内容だけでよいはず」なのに、「同時に、紅梅の花の美しさに感動したことをも伝える」内容となっているのは、匂宮の紅梅愛好の気質、多感で直情的な色好みの性格に由るものだと把握する。門沢氏の指摘通り、匂宮の歌に、紅梅の花の美しさに共感する姿勢が見えるのは、確かに、彼の紅梅愛好の趣向が反映されたからであろうが、一步踏み込んで解釈すれば、それは、その花を宮の御方と同一化する認識が匂宮に存在したからではなかろうか。

傍線部(c)の「思ふ心は異にしみぬれば、この返り事、けぎやかにものたまひやらず」と書いてあるように、この返歌には、宮の御方に対する匂宮の姿勢や思惑が反映されており、反実仮想による拒絶の内容は、「自分が花の香りに誘われるべき資格があるならば、その誘いに応じるはずだ」という、ある意味で承諾の余地を残しているとも言える。即ち、ここでの「花」は、中君と宮の御方のことが同時に響くことになっており、花(中の君)の香りに誘われること(大納言の申し入れ)を断りながらも、花(宮の御方)に惹かれることを暗示する二重の意味合いが響く文脈になっていると考えられる。

4. 二度目の紅梅大納言と匂宮との贈答の場面

このように、匂宮の歌における「花」が中君と宮の御方を同時に象徴し、大納言に対する断りの意味と宮の御方に対する自分の気持ちを表すという二重の意味を有していることを指摘したが、そのような傾向は、二度目の二人の贈答の場面にも同様に確認することができる。

(六) これは昨日の御返りなれば見せてまつ。「ねたげにもものたまへかなあまりすきたる方にすすみたまへるを、ゆるしきこえずと聞きたまひて、右大臣、我らが見たてまつるいは、いともまめやかに御心をさめたまふこそをかしけれ。あだ人とせんに、足らひたまへる御さまを、強ひてまめだちたまはんも、見どころ少なくやならまし」などしりうごちて、今日も参らせたまふに、また、

(大納言) 「③ 本つ香のにはほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ

10) 門沢功成の上掲論文。p153-173

とすきずきしや。あなかしこ」と、まめやかに聞こえたまへり。まことに言ひなさむと思ふところあるにやとさすがに御心ときめきしたまひて、(匂宮) ④花の香をにほはす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめんなど、なほ心解けず答へたまへるを、心やましと思ひるたまへり。

(紅梅卷五三頁)

匂宮の返歌を受け取った紅梅大納言は、それが拒絶になっていることに苛立ちを感じている。が、匂宮の返事のことを「いとものまめやかに御心をさめたまふ」と批判しているように、大納言は、その返歌が宮の御方のことをもかけた二重の意味を持つ内容であることには気づかなかったようである。しかし、その返歌が拒絶ではあるものの、婉曲な拒絶になっているのを、中君への承諾の余地を残していることと見て、再び匂宮に③の歌を贈る。

その歌は、「もともと香り高くいらっしゃるあなたの袖が触れたら、こちらの花もただならぬいい世間の評判を広めることになりましょう」という内容である。それは、大納言自分からも、「すきずきしや、あなかしこ」と言っているように、前よりも積極的に結婚を求める歌となっている。その大納言の贈歌を見た匂宮は、中君との結婚に積極的に申し出る大納言の態度にときめきしながら、又、拒絶の返歌(④)を贈る。それは、「花の香りを匂わせる宿を訪ねて行ったら、色を好む、好色な男だと世間から咎めるだろう」の意となる。

前の贈答歌(①と②)の場合、『古今集』の紀友則の歌を引用していることが確実視されるのに比べると、この③と④の贈答歌については、その典拠を探る研究があまり行われてこなかったように見受けられる。まず、大納言の贈歌(③)の典拠としては、『花鳥余情』11)が、『兼輔集』の「もとのかのあるだにあるを梅花いと匂ひのそはりぬるかな」12)の歌を挙げ、現代の注釈書の中では、『大系』のみが補注でそれを紹介する程度である。更に、諸注釈の中で、匂宮の返歌(④)の典拠に関する言及は見当たらない。

しかし、最近、門沢氏により、『古今集』の梅花歌群(春上・三二一三五番歌)が、この二人の贈答の背景にあることが検証され13)、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』においても、三三番歌と三五番歌は、各々③と④の参考歌として載せられていくことになる。

11) 中野幸一編(1978.12) 源氏物語古註釈叢刊第二巻『花鳥余情』武蔵野書院、p308

12) 以下、『兼輔集』の本文引用と和歌の歌番号は、西本願寺蔵「三十六人集」を底本とする『新編国歌大観第三巻』(1985.5) 角川書店p42による。適宜傍線・記号を付し、表記を改めた所がある。

13) 門沢功成の上掲論文。p153-173

- ・ 折りつれば袖こそほへ梅花有りとかここにうぐひすのなく
(春上・三二・読み人知らず、題知らず)
- ・ 色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ども
(春上・三三・同)
- ・ 宿ちかく梅の花うゑにあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり
(春上・三四・同)
- ・ 梅花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる
(春上・三五・同)

門沢氏は、これらの『古今集』の歌が「恋愛関係が想起される点も、紅梅大納言の贈歌を理解する上で参考にな」と指摘し、特に、紅梅大納言の③の歌と三三番歌¹⁴⁾とは、「袖が触れることによって梅の花の香りが移る」という点で同じ趣向であると言及している。更に、『古今集』の三五番歌は、「梅の花を観賞していて、移り香のせいで咎められる」という点で、④の句宮の返歌と同様の発想であると指摘する。このように、三五番歌を④の句宮の歌と関わせる門沢氏の指摘は、④の歌を理解するに際して、重要な示唆を与えるものと思われる。

『古今集』の三五番歌は、又、『兼輔集』の中で、兼輔の歌（八番歌）として収録されている。以下は、『兼輔集』に収録されている歌を引用したものである。

しのびたる人のうつりがの人とがむるばかりしければ、その女に
梅花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみぬる（八）
これもをんなに
もとのかのあるだにあるを梅花いとど匂ひのそはりぬるかな（九）

『古今集』の三五番歌の部立てが春上に属したものであることに比べると『兼輔集』の歌の場合、「しのびたる人のうつりがの人とがむるばかりしければ、その女に」という詞書が付されることによって、恋の場において行われる歌となっている。更に、この歌の配置を見ると、『花鳥余情』が大納言の歌（③）の典拠として取り上げた兼輔の歌（九番歌）が、その次に、同じ恋の場での歌として一対をなしていることも興味深い。

『古今集』の三五番歌は、「梅花に立ち寄る時から、他の女の袖の移り香ではないかとあの人が咎めるほど、梅花の香りが染み付いてしまった」の意となり、春の季節

14) 『古今集』の三三番歌は、「色よりも香りが心にしみじみと感じるものだ。誰の袖が触れてその袖からの移り香が薫るこの家の梅なのか」と意となる。

の対象として「梅花」の香りをたたえるのに、恋愛感情と結びつけて歌いあげたものである。

しかし、『兼輔集』の歌は、具体的な恋の場を想起させる詞書により、ここでの「梅花」は、忍び通っていた女の喩えとなっており、その花（あなた）の香りが他の女が咎めるほど染み付いてしまったと、その忍び通っている女に詠みかける歌となる。このように、『兼輔集』では、梅花（女）の所へ立ち寄り、その移り香のせいで人に咎められるという歌の基底に、一人の男性が二人の女性のもとに通う、という色好みの世界が投影されているのである。実は、このような歌の相は、匂宮の返歌にも同様に見て取れるのではなからうか。

『全集』『新全集』の頭注では、匂宮の歌における「宿」を中君と解し、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』では、紅梅大納言邸として解する。が、『大系』の頭注が「花の香りを匂わせている宿」（中の君の許）と、両者をかけて説明しているように、諸注釈が指している「宿」とは、中君のいる邸宅を意味するものであり、両者の差はあまりないと見るべきであろう。即ち、この④の歌は、諸注、匂宮の返歌を大納言の贈歌と対応して、中君のいる大納言の邸を尋ねていくと、人に色好者として咎められる意として解釈しているのである。

もちろん、諸注の指摘通り、大納言の歌に対する返歌という観点からすれば、その「花」は中君を指すものと解すべきである。しかし、ここでの「花」とは、中君を意味すると同時に、匂宮が関心を寄せていた同じ邸宅に住む宮の御方をも響かせているものではなからうか。匂宮が、その大納言邸を訪問するということは、大納言の願い通り、中君の所を来訪することになる。と同時に、日頃の心を寄せていた宮の御方の所に立ち寄ることになる。匂宮が大納言邸への訪問を、「色にめづやと人のとがめん」と結びつけて考えているのは、『兼輔集』の歌のような、一人の男性と二人の女性という構図が浮かび上がっていたからではなからうか。即ち、この歌は、大納言の申し入れに対して、「中君」の所に訪れることを拒絶するという、表面的な歌意だけではなく、同じ邸宅に住む二人の女君のことを念頭に置き、そこへの訪問の困難さを仄めかす内容となっていると思われる。

大納言の意図と、大納言の邸宅を訪問することが二人の女性の居所を訪ねていくことになることを認識していた匂宮は、結局紅梅大納言邸を直接訪問せず、内密に文をよこす形で宮の御方に接近するのである¹⁵⁾。

15) 「宮は御ふさひの方に聞き伝へたまひて、深う、いかでと思ほしなりにけり。若君を常にまつはし寄せたまひつつ、忍びやかに御文あれど、大納言の君深く心かけきこえたまひて、さも思ひたちてのたまふことあらば、気色とり、心まうけたまふを見るに、いとほしう……」（紅梅卷五五頁）と書いてあるように、匂宮は、若君を通して手紙をよこす等、人目立たぬように、宮の御方に接近していることが分かる。

5. おわりに

以上、紅梅巻における紅梅大納言と匂宮との歌の贈答歌を取り上げ、登場人物との居所と関わらせて考察してみた。

従来匂宮の返歌における「紅梅の花」は中君をさすものとして理解され、大納言の結婚の申し込みを断るという単一の内容として把握されてきた。しかし、以上見てきたように、匂宮の歌における「花」は、中君と共に宮の御方のことをも響かせるものとなり、そのような二重の意味を有する複雑な内容になっていたのである。このように、この巻における、紅梅の花をめぐる匂宮と大納言との認識のズレというのは、紅梅が植えられた場所と中君と宮の御方の居場所をどう把握するかという問題と深く関わっており、それは、大納言と匂宮とのやりとりや歌の解釈にも密接に関わっていくものであったのである。

この巻の冒頭には、柏木死後、藤原氏の当主となった大納言が、七間の寝殿を造り、一家の不興のために娘の入内に力を入れる姿が描かれている。このような一家を統合しようとする大納言の意図は、紅梅を自分の邸宅のものとし、中君の象徴と把握した大納言の姿勢と重なる。しかし、大納言がその紅梅の「東」という位置を見逃しているごとく、大納言は、若君が匂宮を宮の御方の相手として取り持ちしようとすることや、真木柱が、匂宮がその後も宮の御方に接近していることを大納言に内緒にする等といった、家族たちの亀裂に気づかないのである。

それに比べて、東面にある紅梅の花を、そこに住む宮の御方の象徴として認識していた匂宮は、大納言との歌の贈答に際して、その花を自分の娘と見る大納言の意中を汲んで返事をしながらも、そこに宮の御方への自分の気持ちを重ねつつ表現している。従来、匂宮は、「あだ人」として指摘され、薫の慎重な性格、誠実な態度に対して、「匂宮の一筋に行動的な色好み」¹⁶⁾としての側面が主に強調されてきたが、このような、紅梅大納言とのやり取りや宮の御方への接近の姿勢からは、相手の意中を慎重に読み取るような性格の一面も垣間見られるのである。

このように、紅梅巻は、登場人物の居場所やその空間表現に注目して読むことによって、物語における人物のありようや物語の内容や物語世界が明確に、しかも多層的に把握できる仕組みになっていると言えよう。

16) 森一郎 (1982.2) 「匂宮」『別冊国文学N o 13源氏物語必携II』学灯社 p95

【参考文献】

- ・ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注訳（1975.5）日本古典文学全集『源氏物語五』小学館 p33～50
- ・ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注（1997.7）新編日本古典文学全集『源氏物語⑤』小学館 p39～56
- ・ 池田亀鑑校注（1954.1）日本古典全書『源氏物語五』毎日新聞社 p150～163
- ・ 石田譲二、清水好子校注（1982.5）新潮日本古典集成『源氏物語六』新潮社 p181～196
- ・ 神野藤昭夫(1986.5)「紅梅卷の機能と物語の構造——『源氏物語』宇治の物語論のための断章——」『源氏物語とその前後』桜楓社 p163-183
- ・ 玉上琢弥著（1967.7）『源氏物語評釈第九卷』角川書店 p247～284
- ・ 中野幸一編（1978.12）源氏物語古註釈叢刊第二卷『花鳥余情』武蔵野書院、p308
- ・ 原陽子(1991.11)「紅梅卷と宇治十帖——宇治十帖後半の論理に果たす紅梅卷の機能——」『中古文学』第四十八号 p45-53
- ・ 三田村雅子(1996.3)「方法としての〈香〉」『源氏物語感覚の論理』有精堂、p153-173
- ・ 『新編国歌大観第一巻』（1983.3）角川書店 p9～33
- ・ 『新編国歌大観第三巻』（1985.5）角川書店 p42
- ・ 森一郎（1982.2）「匂宮」『別冊国文学No13源氏物語必携Ⅱ』学灯社 p95
- ・ 門沢功成(2004.5)「『源氏物語』紅梅卷の贈答歌と引歌群——梅花への共感と匂宮への共感——」『古代中世文学論考』第十二集,新典社. p153-173
- ・ _____ (2005.3)「『紅梅』卷の贈答歌の解釈」『源氏物語の鑑賞と基礎知識No38 匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂 p124-126
- ・ 鈴木一雄監修・陣野英則編集(2005.3)『源氏物語の鑑賞と基礎知識No38 匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂 p77-126
- ・ 山岸徳平校注（1962.4）日本古典文学大系『源氏物語四』岩波書店 p235-248

要 旨

光源氏の死後、頭中将家の後日譚を描く紅梅卷では、紅梅大納言と匂宮との贈答を中心に、大納言家の婿どりの物語が展開されていく。

現代の諸注釈や先行研究では、紅梅大納言の贈答を、実子である中君との結婚を匂宮に申し込むものとして解釈し、それに対する匂宮の返歌も、中君に対する大納言の結婚の申し込みを断るものとして理解されてきた。しかし、本稿では、登場人物の居場所に注目し、それを物語本文や歌の解釈に反映させることによって、従来とは異なる読みの可能性を探ってみた。

寝殿の西面にいる中君と、東面にいる宮の御方という、二人の女君の居場所と、紅梅が植えられた場所をどう把握するかという問題は、紅梅の花をめぐる匂宮と大納言との認識のズレを齎す原因となっている。又、それは、大納言と匂宮との歌のやりとりにも密接に関わっていくのである。

即ち、匂宮の歌における「紅梅の花」は、中君と共に、宮の御方のことをも響かせるものとなっており、表面的には、中君との結婚を願う大納言の申し入れを断りながらも、同時に、宮の御方に惹かれることを暗示するという、二重の意味を響かせる複雑な内容になっていたのである。

このように、紅梅卷は、登場人物の居場所やその空間表現に注目して読むことによって、物語における人物のありようや物語の内容や物語世界が明確に、しかも立体的、多層的に把握できる仕組みになっていると言える。

キーワード：和歌、居場所、空間表現、紅梅、象徴、解釈、ズレ、二重性

투 고 : 2006. 11. 30
1차 심사 : 2006. 12. 9
2차 심사 : 2006. 12. 30

住 所 : (449-160) 경기도 용인시 수지구 죽전동 내대지마을 건영캐스빌 803동 2002호
電 話 : 031-898-2426
e-mail : soomikim7@hanmail.net